

＜書 評＞

H. Feneis 著

山田英智 監訳（東京大学名誉教授・福岡大学教授）

石川春律 訳（群馬大学）
廣澤一成 訳（東京大学）

図解 解剖学事典（改訂第2版）

吉川文雄（日本医科大学）

私の手許には大分手垢にそまった Heinz Feneis 教授著の Anatomisches Bildwörterbuch 第3版と、その邦訳書図解解剖学事典が必ず存在している。Feneis 教授の原著を手に入れたのは10年近くも前の事であった。発注するまでは“随分思いきったタイトルの著書”としての興味のみであったが、入手してページをめくるに従って私はだんだん興奮してきたのであった。当時の——いや、今日でもそうであるが——私の生活の核心は、膨大な解剖学の用語名のあれこれを、これまた膨大な解剖学成書をあれこれと頁をくり乍ら“質問をかかえた学生”にどの様に手際よく応答理解させるかにあった。私の切願にも似たその思いが本書がまさに具現していたからであった。ちなみに原著第1版の序文には本書の完成に多くの学生の協力を得たと述べられている。まさに訳者の一人である山田英智教授が、その訳者序に書いているごとく「解剖学で使用される多数の用語を、要領よく図と対

比しつつ簡単な説明を加えた本書は、学生諸君の勉学の伴侶」としてその利用価値はまことに、多大である。

邦訳書の第1版は原書の第3版で、1974年である。その後原書は第5版となり、その邦訳が今回の第2版として、さらに面目を新たに出版された。驚いたことに、今回の訳書の冒頭にロンドン大学名誉教授 Roger Warwick 教授の序がのせられているが、その感懐がまさに、私の上記のそれと全く同様である。いわく「Feneis 著解剖学事典は、まさに驚くべき成功を得た本であった。私はその初版が現われたとき、これほど役に立つ本が出版されることは誰も思いも及ばなかったという驚きを今でもありありと想い出すことができる。この本は私の机上の手のどく範囲に常に置かれ、私はしばしば参照させてもらっている。解剖学の領域では長年にわたって多くの本が出版されてきたが、その中で少数のもののだけがその独創性と時間

を超えた有用性をもつ。この本は疑いもなく、その中での選ばれた書物である」と。

著者 Heinz Feneis 教授自身は第5版の序において「解剖学事典は簡明な情報と共に、現在通用している国際解剖用語委員会決定の解剖学用語を提供するものでなければならない」との書き出しの下に、第5版は最も新しい Nomina Anatomia 4版の改変に基づくものであるが、国際用語が改訂されたという理由の他に、より大きな改版の理由が「同僚や学生諸君からの本書に寄せられた提案」からであると述べている。本書の益々足の地についた感が伝わって嬉しく思われる。

さて、実際に今回の邦訳第2版は、活字、図ともにやや大型となり、大変に見易く、使い易くなっている。総頁はわずか10頁ほど多いのに関らず、新図ないし改訂図が百数十葉に及ぶのも、並々ならぬ工夫と努力の結晶であろう。とにもかくにも難解な解剖学用語の一つ一つが、サラリとした挿図の中にピタリととらえることが出来るのであるから驚きである。本書が学生諸君、研修医諸君をはじめ、広く臨床医家にもその座右に備えられ、活用されんことをおすすめするものである。

（A5変形、頁512、図199、1983、
¥3,200、¥300、医学書院刊）